



中京画壇の日本画家たち

—— 名古屋美術館のコレクションより

中京画壇の日本画家たち——名古屋市美術館のコレクションより

目次

四 中京画壇——名古屋で活躍した日本画家たち

近藤将人一名古屋市美術館学芸員

画家・作品紹介

八 奥村石亭《月次山水図屏風》

九 石河有鄰《巖上孔雀図》／水谷芳年《花鳥図屏風》

一〇 熊沢古篷《勁翮排霜図（鷹野猛威）》／松田杏亭《双鯉図》

一一 水野清亭《春麗》／佐藤空鳴《晚春（分譲地風景）》

一二 石川英鳳《白雪皚々》／朝見香城《南蛮船》

一三 渡辺幾春《蓄音機》／横山葩生《晴れたる日》

一四 喜多村麦子《暮れ行く堀川》／富田范溪《麦畑》

一五 清水有聲《椿咲く島》／平岩三陽《山は粧ふ》

一六 服部有恒《業平観梅》／林雲鳳《玄上》

一七 森村稲門（宜永）《題不詳（合戦図）》／山田秋衛《竜宮城図屏風》

名古屋で活躍した画家たち（《東海秀美帖》昭和四年「一九二九」より）

一八 森村宜稲／小寺雲洞／渡辺秋溪（谿）

一九 波多野一岳／狩野梅斎／青木栖古

二〇 織田旦斎／織田杏逸／近藤白鳳

二一 中京画壇年表

二二 中京画壇関係図

二三 主要参考文献

・本リーフレットは、令和七年九月二七日（土）から一二月七日（日）までを会期として開催する常設企画展「近代名古屋の日本画界」に際して制作したものである。実際の展示作品と掲載作品が異なることがある。

・常設企画展「近代名古屋の日本画界」の企画、本リーフレットの作家・作品解説、および中京画壇年表、中京画壇関係図参考文献の執筆・編集は、名古屋市美術館学芸員・近藤将人が担当し、同館学芸課長補佐・松井美保、同館会計年度任用学芸員・福岡優里、山田真央香がこれを補佐した。

・作品写真の撮影は福岡栄（スタジオピュア）が、リーフレットのレイアウトは岡田和奈佳が担当した。

中京画壇——名古屋で活躍した日本画家たち

近藤将人 名古屋美術館学芸員

一、はじめに

名古屋市美術館では「エコール・ド・パリ」「メキシコ・ルネサンス」「郷土の美術」「現代の美術」の四つの収集方針に基づきコレクションを収集・形成してきた。この内、日本画は主に「郷土の美術」に属する。左記がその概略である。

明治から今日にいたるまでの郷土ゆかりの代表的な作家の作品を収蔵し、郷土の美術ゆかりの代表的な作家の作品を収蔵し、郷土の美術の歴史が概観できるよう収集することを心がけてきた。この場合、郷土で活躍した作家はもちろんのこと、郷土出身の作家や、またなんらかのかたちで郷土と関係のある作家も含まれる。また、これら郷土の美術をより良く理解できるようにするために、それぞれの作家に影響を与えた日本の近代を代表する作家も収集の対象としてきた。

（「名古屋市美術館のコレクションについて」『名古屋市美術館コレクション選』所収、平成一〇年「一九九八」）

こうした収集方針を元に、名古屋市美術館では中京地域出身の川合玉堂、前田青邨などの作品を収集してきた。全国レベルの画家の名品が名古屋市美術館コレクションに不可欠であることに疑いは無く、その顕彰は美術館の

重要な使命である。一方で、こうした日本画家たちは出生地こそ中京地域であるが、主な活動拠点は関東が中心であり、「郷土で活躍した」という文脈に必ずしも当てはまらない。

ここで、「郷土で活躍した画家」に注目すると、名古屋には明治以降、同好社（同好画会）に代表されるいくつかの絵画団体が形成され、多くの日本画家が活動していた。また、大正に入ると朝見香城や石川竹邨、昭和には我妻碧宇のように、出生地こそ他地域であるが、名古屋に転居し画業の大部分を当地で過ごした画家たちも現れた。こうした画家たちは、今日では全国的な知名度はおろか、地元ですらほとんど忘れ去られている。しかし、中京地域に着目した場合、重要なのはむしろこうした「地域に根差し、地域で活動した画家」なのではないか。

既に洋画では愛美社、サンサシオン、緑ヶ丘中央洋画研究所などの地域美術団体の研究の蓄積があり、名古屋画廊の中山真一による『愛知洋画壇物語』『愛知洋画壇物語Ⅱ』（風媒社刊）や、令和元年（二〇一九）に愛知県美術館で開催された特別展「アイチアートクロニクル 1919—2019」などによって、「地域に根差し、地域で活動した画家」を体系的に辿ることがある程度可能になっている。しかし、日本画については、体系的に辿るための研究蓄積が十分とは言えない〔註一〕。

二、常設企画展「近代名古屋の日本画界」について

常設企画展「近代名古屋の日本画界」は、名古屋市美術館の日本画コレクションを中心に、戦前に活躍した中京地域の日本画を紹介するもので、東京、京都、大阪に次ぐ第四極としての中京画壇を内外にアピールする嚆矢となるべく企画した展覧会である〔註二〕。

本展では、名古屋で開催された二つの博覧会―第十回関西府県連合共進会（明治四三年「一九一〇」）と御大典奉祝名古屋博覧会（昭和三年「一九二八」）―を取り上げつつ、当時の中京地域で活躍していた日本画家とその作品を取り上げる〔註三〕。第十回関西府県連合共進会の付帯事業である名古屋開府三百年記念新古美術展覧会を契機に結成された日本初の民間総合美術団体「東海美術協会」と、御大典奉祝名古屋博覧会のパビリオンとして建設された「鶴舞公園美術館」は、戦前の中京画壇を考える上では不可欠である〔註四〕。美術団体や画塾無くしては画家の交流は生まれず、展示施設無くしては作品発表の場は得られない。二つの博覧会はそれぞれ「コミュニティ」と「場」を生み出すきっかけとなったという意味で極めて重要である。

では、そうした時代に中京地域ではどのような日本画家が活動していたのか、次項では名古屋市美術館コレクションの日本画作品を「旧派系」「京都画壇系」「東京画壇（愛知社）系」の三つの系統から見ていきたい。ただし、これはあくまで便宜上の区分であり、画家によっては複数の系統に属する者や、どの系統にも当てはまらない画家がいることを申し添えておく。なお、中京地域を活動拠点としていた日本画家は、画派に関わらず、ほとんどが東海美術協会に所属していた。傍線は本リーフレットに作品が掲載されている

画家である。

三、中京画壇の日本画家たち

1 旧派系

中京地域の日本画の大きな特徴として、東西に比べ近代化の強い波が訪れず、江戸以前の旧派が明治以降もさほど勢いを失わなかったことが注目される。その中でも影響力が大きかったのは、奥村石蘭の四条派と、織田杏齋の南北合派である。

奥村石蘭の門下で、中京地域での活躍という観点で注目すべき画家としては、小寺雲洞や石蘭の子の奥村石亭が挙げられる。杏齋の門下では、甥の織田旦齋、明治末から大正期にかけて中京画壇の中心人物の一人であった石河有鄰や、さらにその門下の水谷芳年が主要な画家である。特に芳年は、中京地域でいち早く京都画壇の近代的傾向を取り入れた画家の一人で、後述の朝見香城、渡辺幾春なども芳年に学んでいる。石蘭、杏齋の両方に学んだ上で、鹿を描き続けた波多野一岳のような画家もいる。

また、上京して旧派の大家である池上秀畝に学んだ狩野梅齋、松田杏亭、富田范溪といった画家もいるが、活動時期を考えると、むしろ「東京画壇（愛知社）系」の項で取り上げるべき画家だろう。さらに、名古屋から少し離れた知多半島の半田では、山本梅莊を中心とした南画系の梅莊派が一大勢力を築いていたことも見逃せない。

2 京都画壇系

中京地域には戦後まで美術学校が無く、日本画を本格的に学ぶには、東西

に出る必要があった。その内、京都で早期に絵画学習を行った画家としては、竹内栖鳳に学び初期の京都画壇で活躍した加藤英舟が挙げられる。また、明治四二年（一九〇九）に開学した京都市立絵画専門学校で学んだ水野清亭は、在学中に三回連続で文展に入選するなど早期に頭角を現したが、早逝しており中京画壇に影響を与えたとは言いがたい。明治期の京都画壇の影響として注目すべきなのが、久保田米僊に師事した渡辺秋溪（谿）、藤島華僊、大矢米年といった画家たちである。秋溪と華僊は、米僊が来名時に設立した仙洞画塾の運営を引き継ぐだけでなく、東海美術協会の幹部や公募展の審査員も担っている。

京都画壇系の画家たちで、中京画壇の近代化に決定的な影響を与えたのは、やはり愛土社の面々だろう。大正七年（一九一八）に京都市立絵画専門学校の同級生である佐藤空鳴、織田杏逸（杏斎の三男）、石川英鳳、和田晴雨によつて結成された愛土社は、浅井正臣、大竹敬康、大岩聚星といった後輩を加え、同一年から名古屋で展覧会を開催した。また、ほぼ全員が西山翠嶂の画塾・青甲社に所属していた。なお、空鳴は生涯京都を拠点とし、青甲社の運営にも携わっている。また、戦後中京画壇の代表的画家である嶋谷自然も昭和六年（一九三一）に青甲社に入塾した。

愛土社の結成に遡る大正元年（一九一二）に名古屋に移住した朝見香城は、中京画壇の最重要人物であり、前述の青甲社の創立時の塾生にも佐藤空鳴と共に名を連ねている。香城の中京画壇での最大の役割は、同門の近藤白鳳や、横山葩生（独学）、渡辺幾春（山元春拳門下）、喜多村麦子（土田麦僊門下）といった非愛土社系で京都での絵画学習経験がある若手画家たちと大正一三年（一九二四）に中京美術院を結成し、その集約を図ったことである。また、自身の画塾からは後述の市野亨や、戦後の名古屋の代表的な現代作家

で名古屋市美術館の主要所蔵作家の一人、桑山忠明を輩出している。

こうした京都画壇系の画家たちは大正から昭和戦前期にかけての中京画壇においては一大勢力であり、戦後まで活躍した画家も多い。

3 一 東京画壇（愛知社）系

戦前の中京画壇は、主に京都画壇系の画家たちが牽引したが、東京で絵画学習を行った画家たちもいた。名古屋との関係において重要な絵画団体が、大正六年（一九一七）に、在東京の中京出身官展作家である川崎小虎、富田范溪、洋画家の太田三郎、加藤静児によつて結成された愛知社である。愛知社は定期的に名古屋で展覧会を開催し、東京の気風を名古屋に伝えるだけでなく、同展では昭和五年（一九三〇）の第五回展より公募も行い、伊藤明代乃や松田杏亭など中京在住の画家たちも参加した。当時の川崎小虎の講評によれば、京都画壇系は東海美術協会展、東京画壇系は愛知社展を中心に出品していたことがわかり、ある程度の東西の棲み分けが行われていたことが伺える。

また、東京画壇系で注目すべきが、森村宜稲の門下を中心とした復古やまと絵系の画家たちである。名古屋では復古やまと絵の祖と言われる田中訥言以来の伝統があり、明治以降は訥言に私淑した森村宜稲が、自身の画塾・稲香画塾で多くの門弟を抱えた。門弟の中で頭角を現した服部有恒、森村稲門（宜永）、林雲鳳といった画家は、上京して、新興大和絵の松岡映丘に師事し、前述の愛知社にも所属し活動した。名古屋出身で上京して映丘門下となった山田秋衛もこの系統に連なる。雲鳳と秋衛は後に帰郷するが、画家としての活動に加え、絵画制作で培った有職故実の知識を活かし、地域史研究や文化財行政の分野でも名古屋に多大なる貢献を果たした。

また、昭和戦前期には、小室翠雲門下の小川鴻城の帰郷や、中村岳陵門下の我妻碧宇の移住が相次ぎ、中京画壇は大きな盛り上がりを見せた。特に碧宇は、中京地域在住者初の帝展特選となっただけでなく、中村正義、森緑翠、平川敏夫など戦後の中京画壇を代表する画家たちとの深い交流の中で、彼らに計り知れない影響を与えている。また、昭和六年（一九三一）には、朝見香城の画塾で学んだ市野亨が川端龍子の青龍社展に入選し、その後は中京地域の主要な青龍社同人として存在感を示した。

四、おわりに

これまで、中京画壇の画家たちを三系統に分けて見てきたが、もちろんこうした系統に当てはまらない画家もいる。平岩三陽は、東京美術学校で川合玉堂に学び、卒業後は東京を中心に活動したが、大正一二年（一九二三）の関東大震災を機に岡崎に帰郷、以降は岡崎を活動の中心とした。熊沢古蓬は、医業の傍ら余技で絵を嗜み、東海美術協会展などに出品を続けた。昭和四年（一九二九）に東海美術協会の画家たちが古蓬に贈った《東海秀美帖》（名古屋市美術館蔵）は、当時の東海美術協会の主要会員とその画風が判明する極めて高い資料的価値を持つ作品である。

このように、中京地域には明治以降に多くの画家が活動しており、画家コミュニティである画壇も形成されていた。しかし、現在そうした画家たちの活動や作品は、ほとんど忘れ去られてしまっている。常設企画展「近代名古屋の日本画界」の開催を機に、中京画壇についての新情報の提供や作品の再発見が進むことを願って止まない。

註一

先行研究については巻末の参考文献を参照のこと。

註二

中京画壇という呼称は、江戸時代以降の中京地域の画家を網羅的に紹介した田部井竹香『古今中京画談』が刊行された明治四四年（一九一一）前後から見られる。他に名古屋画壇、愛知画壇といった表記があり一定しないが、名古屋および周辺地域には明治時代ごろから現在に至るまで、岐阜県美濃地方、三重県北勢地方を包括した圏域意識があったことを踏まえ、本稿では原則中京画壇の呼称を用いる。

註三

第十回関西府県連合共進会は明治四四年（一九一〇）に開催された愛知県主催の博覧会。農産物や工芸品を中心に北海道・東北・九州を除く全国からの出品物が展示され、会場として鶴舞公園が整備された。同じく鶴舞公園を会場として昭和三年（一九二八）に名古屋勸業協会主催で開催された御大典奉祝名古屋博覧会は、天皇即位の奉祝事業として行われた博覧会で、実質的な内容は名古屋の産業振興を目的とした産業博覧会であった。

註四

東海美術協会については拙稿「東海美術協会と中京日本画壇」（名古屋市美術館研究紀要第十八巻）、令和六年「二〇二四」三月、鶴舞公園美術館については拙稿「戦前の鶴舞公園美術館をめぐって」（名古屋市美術館アートペーパー 一二六号）、令和六年「二〇二四」八月を参照。なお、研究紀要、アートペーパーについては令和七年九月現在全て名古屋市美術館公式ホームページで電子版を閲覧可能である。

画家・作品紹介

奥村石亭

一八七四—一九四五

四条派の画家で同好社の結成メンバー・奥村石蘭の長男。初め石蘭に絵を学んだ後、磯部百鱗の門に入った。明治二八年（一八九七）に石蘭が没すると家業を継ぎ、明治四三年（一九一〇）の名古屋開府三百年記念新古典美術展覧会では審査員、東海美術協会では理事を務めた。

月次山水図屏風

大正ごろ 紙本墨画淡彩 屏風（六曲一双）

六曲一雙の各画面に十二の風景を配し、四季の移り変わる様子を描く。個々の画面は独立し、構図やモチーフも全て描き分けられており、山水・花鳥を得意とした石亭の画技の高さ、幅広さを看取することができる。石亭に日本画を学んだ水野清亭の旧蔵品。



石河有鄰

一八七〇—一九五二

尾張藩国老石川正基の三男。園田忠監に土佐派、前田正忠に洋画、織田杏齋から南北合派を学んだ。新古美術展では渡辺秋溪（谿）と共に実務担当として奔走した。各地の共進会や文展に入選を重ね、多数の門人を育成するなど、戦前の中京日本画壇の最重要人物の一人。

巖上孔雀図

大正一二年（一九二三） 絹本着彩・軸装

花鳥を得意とした有鄰の典型的な画風を知ることができる作品。巖上に添えられた牡丹は、大正元年（一九一二）の第六回文展入選作《春庭香艷》の主題である。中央で評価を受けたモチーフは名古屋でも需要が高かったことが推測され、こうした小作にも取り入れられたのだろう。



水谷芳年

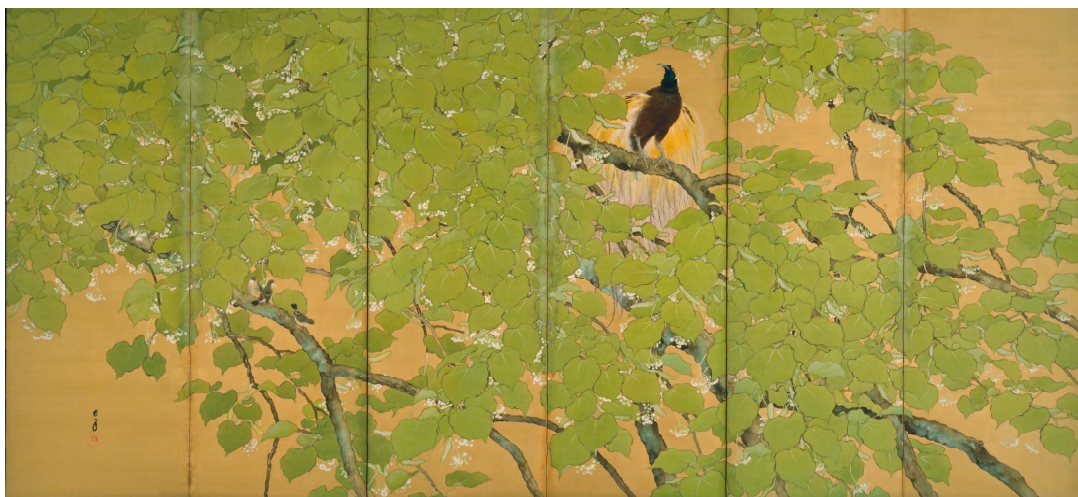
一八七九—一九二八

中島有年に岸派の技法を学んだ後、石河有鄰に南北合派を学んだだけでなく、山本梅逸にも私淑した。花鳥画を得意とし、大正元年（一九一二）には《閑庭秋色図》で第六回文展入選。朝見香城、富田范溪、渡辺幾春に絵を教えた。

花鳥図屏風

一九二〇年代
絹本着彩・屏風（六曲一隻）

芳年の最晩年の作と推測される。大正七年（一九一八）の第一二回文展特選作である石崎光瑤《熱国妍春》を意識したかのような構図感覚は、芳年が名古屋の地で最新の花鳥画の傾向を学習した先駆的な画家であったことを推察させる。



熊沢古蓬

一八六一—一九三四

尾張藩士の子として生まれ、医業の傍ら、余暇で和歌・絵画・篆刻などに親しんだ人物。画業は独学であり、東海美術協会に所属し活動した。第四子の五六は、長年徳川美術館館長を務めた美術評論家・教育者として知られる。

勁翮排霜図（鷹野猛威）

昭和二年（一九二七） 絹本着彩・軸装

勁翮排霜は中国・宋の李祁の詩からの引用で、鷹の翼が剛健である様子を示す。昭和二年（一九二七）の東海美術協会展の出品作。最低限の色彩を用い、鷹を写実的に描き出す、余技の域を超えた古蓬の代表作。



松田杏亭

一八八七—一九六五

織田杏齋に師事し南北合派を学んだ後、上京して池上秀畝に師事、その後帰郷して名古屋を中心に活動した。昭和八年（一九三三）の第十四回帝展入選作《鯉》に代表される魚の名手であり、特に鯉を得意としたことから「鯉の杏亭」と呼ばれた。

双鯉図

戦後（一九五〇年代） 絹本着彩・軸装

杏亭の代名詞である鯉を描く。最低限のモチーフと色を置くことで水中の様子を表し、そこに二匹の鯉を巧みなバランスで配置する。生涯鯉を描き続けた杏亭の円熟期に位置する作品。



水野清亭

一八九三―一九二〇

奥村石亭、福井江亭に絵を学び、京都市立絵画専門学校に入学、在学中に三回連続で帝展に入選するなど、早期に頭角を表した。卒業後は帰郷し活動が続けるが、二八歳の若さで夭折した。

春麗

大正四年（一九一五）

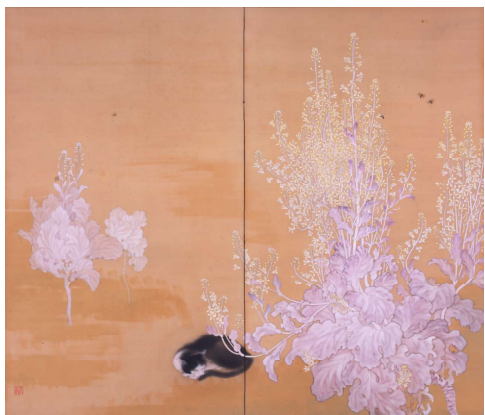
絹本着彩・屏風（二曲一双）

第八回文展入選

清亭の初の文展入選作。虫の舞う紅葉苔（菜花と同じアブラナ科の野菜）の畑に一匹の黒猫が添えられる。前年の文展で褒状を受けた榊原紫峰（※）《夕榮》に構図や題名の付け方が酷似しており、清亭が当時の京都画壇の最先端の傾向を学習していたことを感じさせる。

榊原紫峰 一八八七―一九七一

京都市立絵画専門学校の第一回生、大正七年（一九一八）結成の国画創作協会で革新的な作品を発表。生涯花鳥画を追求したことで知られる。



佐藤空鳴

一八九四―一九四四

京都市立絵画専門学校時代に愛土社を結成し、その中心的存在として活動、同校卒業後も京都を拠点としながら名古屋へ出品を続けた。青甲社にも創立当初から参加し、京都画壇と中京画壇の橋渡しを続けた。

早春（分譲地風景）

昭和四年（一九二九）

絹本着彩・軸装

第六回青甲社展

京都東山付近の早春風景であり、二階建ての新築家屋が主人の入居を待つ様子を描く。京都近郊の宅地風景は空鳴が好んだ画題の一つであり、類似する画題の作品がいくつか知られている。本作は愛土社展にも出品された。熊沢五六旧蔵品。



石川英鳳

一八九六—一九七三

小林松僊に日本画を学んだ後、京都市立絵画専門学校に入学、卒業後帰郷し熱田を拠点とする。大正十三年（一九二四）の第五回帝展から連続八回入選。翌年には蓬萊画塾を創設し晩年まで続けた。昭和十年（一九三五）の熱田神宮の遷座祭では記録絵巻制作を担当。

白雪皚々

昭和八年（一九三三） 絹本着彩・額装
第十回青甲社展

花鳥を得意とした英鳳には珍しい雪山と人物を主題とした作品。同時期の帝展入選作とは画風を大きく異とする。第十回青甲社展出品作であり、画塾展という場だからこそ、実験的な作品に取り組むことができたのだろう。



朝見香城

一八九〇—一九七四

姫路出身で森月城、京都で西山翠嶂に学び、大正元年（一九一二）に来名。東海美術協会審査員、中京出品協会理事を歴任。青甲社には結成時から参加。中京画壇の形成・発展に著しい貢献を果たした最重要画家の一人。

南蛮船

昭和二十年代 紙本着彩・額装

香城は昭和四年（一九二九）に《港二題（長崎互市・平戸入港）》で第九回帝展に入選しているが、本作はそのうち平戸入港に非常によく似た作品である。本作は来歴から戦後の作であることが判明しているが、明らかに戦前の自身の帝展入選作を下地として描かれた作品。



渡辺幾春

一八九五―一九七五

水谷芳年に学んだ後、京都で山元春挙に師事し、画塾・早苗会にも所属した。中京美術院の結成に参加。名古屋では数少ない美人画の名手であり、著名な美人画コレクションの中にも幾春の作品が含まれる。

蓄音機

昭和八年（一九三三） 絹本着彩・屏風装（二曲一隻）
第十四回帝展入選

着物を着た女性が蓄音機の前に座り、音楽を聴く様子が描かれる。和装女性に明治以降のモチーフを組み合わせた当時流行したタイプの美人画。第十四回帝展入選作で、翌年に鶴舞公園美術館で開催された名古屋帝展にも出品された。



横山葩生

一八九九―一九七七

瀬戸市出身、国立陶磁器試験所時代に独学で日本画を始め、大正九年（一九二一）に帝展初入選、翌年名古屋に帰郷し、中京美術院の結成に参加した。独特な自然が表出された風景画を描く。妻の余祢、娘の朱美、萬里も画家。

晴れたる日

昭和十一年（一九三六） 絹本着彩・屏風装（二曲一隻）
改編帝展入選

真冬の青空を、清新な表現によりその空気感までを描き出す。当時の中京画壇としても異色な作品。葩生は昭和九年（一九三四）に名古屋の二〇―三〇代の若手画家で結成された青樹社に招かれている。先駆的な作風を示した葩生は、名古屋の若手画家たちの身近な目標として最適だったのだろう。



喜多村麦子

一八九九—一九八六

森村宜稲の稲香画塾で日本画を学んだ後、京都市立絵画専門学校別科に入学、土田麦僊、福田平八郎に師事した。中京美術院の結成に参加。戦時中に光穂に画号を一時変更、一宮市木曾川町に疎開し、以降は同地を拠点とし活動、川合玉堂の顕彰活動も行った。

暮れ行く堀川

昭和三年（一九二八） 絹本着彩・額装

御大典奉祝名古屋博覧会 銀牌

麦子の師である土田麦僊らが設立した国画創作協会の影響色濃い画風で名古屋の風景を描き出す。鶴舞公園美術館に展示されたことが判明している数少ない現存作であり、麦子の画業はもちろん、名古屋の戦前史においても重要な意味を持つ作品である。



富田范溪

一八八三—一九三五

水谷芳年に絵を学び、後に上京、池上秀畝に師事。東京美術学校在学時の大正三年（一九一四）に文展に初入選を果たした。昭和八年（一九三三）時点では、秀畝の伝神洞画塾の幹事を務めていた。愛知社の結成にも参加し、定期的に名古屋で展覧会を開催、帝展の気風を伝えた。

麦畑

昭和八年（一九三三）ごろ 絹本着彩・額装

近景に収穫を控えた麦、中景に花をつけた李（すもも）を整然とした構図で描く。モンシロチョウが添えられており、初夏の風景だろう。同様の構図は、昭和八年（一九三三）帝展入選の《温室》にも見られ、近い時期の作と推測される。



清水有聲

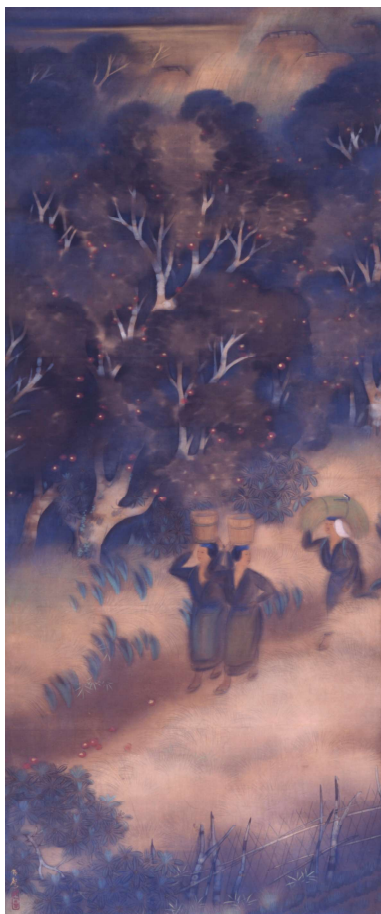
一八九〇—一九六三

川合玉堂に師事、初め玉琴と号して第十二回文展に初入選、その後画号を有聲とし、帝展、新文展に入選を重ねた。愛知社同人としても活動し、度々名古屋にも作品を出品したが、生涯東京を拠点とした。

椿咲く島

大正九年（一九二〇） 絹本着彩・軸装
第二回帝展入選

椿の名所として知られる伊豆大島の風景と、そこで暮らす人々を描く。前景、中景、後景で構成され、中景が画面の右上から左下に斜めに横切る構図は、師である川合玉堂の作品によくみられる構図。当時の有聲が玉堂の影響下にあったことを示す作品。



平岩三陽

一八九三—一九八二

東京生まれ愛知育ち、川合玉堂の門に入り東京美術学校に入学、大正一二年（一九二三）の関東大震災で自宅を焼失し、父の故郷岡崎市に転居し、以降同地を拠点に活動した。戦後は日展委員となるも、次第に出品活動からは遠ざかっていった。

山は粧ふ

昭和一二年（一九三七） 紙本着彩・屏風装（二曲一隻）
第一回新文展入選

画面を埋め尽くすような樹々の描写が特徴。青々と葉をつけた樹々が目立つが、紅葉した樹々も多く、秋の山が描かれていることがわかる。画題も中国の画家・郭熙が秋の山を表した言葉から取られている。



服部有恒

一八九〇—一九五七

森村宜稲に師事した後、上京して松岡映丘に入門。大正一〇年（一九二一）に帝展初入選、昭和三年（一九二七）の第九回展では特選となった。翌年の新名古屋屋市庁舎竣工に際しては師の映丘と共に貴賓室に織豊の図を共作した。愛知社同人。

業平観梅

昭和一〇年代

紙本着彩・屏風装（二曲一隻）

古今和歌集の在原業平の句で、伊勢物語にも載る「月やあらぬ春や昔の春ならぬ我が身ひとつはもとの身にして」に取材したと思しき作品。平安時代の女性は梅の香を袖に入れて香りを移す慣習があり、梅を見て在りし日の恋人に想いを馳せているのだろう。



林雲鳳

一八九九—一九八九

森村宜稲の稲香画塾でやまと絵を学んだ後に上京し、松岡映丘に師事、帝展を中心に活躍した。戦後は帰郷し、画業の傍ら名古屋市豊清二公顕彰館（現名古屋市秀吉清正記念館）の資料調査委員を務めるなど、文化財行政にも携わった。

玄上

昭和四年（一九二九）

絹本着彩・軸装

玄上とは能の演目の一つで、琵琶の名手である藤原師長の伝承がテーマ。村上天皇の霊が師長に琵琶の名器「獅子丸」を授けるシーンが描かれる。上京直後、歴史画家として頭角を現しはじめた時期の作品。日本美術協会展出品作。



森村稲門（宜永）

一九〇五―一九八八

東京美術学校在学中に画才を見込まれ森村宜稲の娘婿となり、同校卒業後は松岡映丘に入門。西洋風の風景画で官展に入選を重ねた。昭和十三年（一九三八）に宜稲が死去してからは宜永と号し、やまと絵の系譜を引き継いだ。

題不詳（合戦図）

昭和前半 紙本着彩

作品裏面の情報から東海美術協会展出品作であることが判明しているが、出品回については判明しておらず、現状画題も不明。宜永は宜稲が亡くなる前は西洋風の風景画を中心に描いており、宜稲没後、稲門から宜永へと画号を変えるごく短い時期に描かれた可能性がある。



山田秋衛

一八八八―一九六八

服部石仙に師事した後、上京して松岡映丘に入門し、帝展を中心に活躍した。郷土史家としても知られ、戦後は名古屋市文化財調査委員長、愛知県文化財専門委員を務めた。『名古屋市平和公園墓地名家録』の編集や『前津旧事誌』といった著作で知られる。

竜宮城図屏風

昭和二年（一九二七）ごろ

絹本着彩・屏風装（六曲一隻）

浦島太郎、あるいはその原型となった「海幸彦山幸彦」の一場面を、復古やまと絵の技法を用いて描く。陸と海をシームレスに繋ぎ、海辺の岩場には松と鷗、海中には色とりどりの魚やサンゴ、海藻が描かれる。



名古屋で活躍した画家たち―《東海秀美帖》昭和四年「一九二九」より

熊沢古篷のために、東海美術協会の日本画家を中心に作成された画帖《東海秀美帖》から、「作家・画家紹介」で取り上げ切れなかった主要な中京画壇の画家たちを紹介します。

森村宜稲

一八七一一一九三八

尾張藩儒学者・森村宜民の子。木村雪溪、日比野白圭、木村金秋に絵を学んだ。田中訥言に私淑し、復古やまと絵の技法を学んだ。各地の共進会や官展に出品・入選を重ね、昭和七年（一九三二）には帝展推薦となった。また、稲香画塾を主宰し、多くの後進を育てた。



小寺雲洞

一八七一一一九三〇

尾張藩士小寺竹洲の子、奥村石蘭に日本画を学び、石蘭の没後は京都に出て竹内栖鳳に師事した。東海美術協会では常務理事と審査員を長年務め、御大典奉祝名古屋博覧会では参事として美術部審査員を務めた。



渡辺秋溪（谿）

一八六六一一九四〇

奥村石蘭に師事した後、京都に出て久保田米僊に師事した。京都府画学校の教師を務めたが、後に帰名。米僊が名古屋で開いた仙洞画塾の運営を引継いだ。秋谿は晩年の画号であり『古今中京画談』には秋溪とある。



波多野一岳

一八七七—一九五七

奥村石蘭に師事、石蘭没後は鷺見春岳、織田杏齋に師事し南北合派、土佐派、四条派の画風を修めた。鹿の絵を最も得意とし「鹿の一岳」と呼ばれた。日本陶器（現ノリタケカンパニーリミテド）で陶器の図案作成も行った。



狩野梅斎

一八八三—一九六九

石河有鄰に師事し南北合法を学んだ後、上京して池上秀畝に師事した。花鳥画、特に鶴を得意とし、第十二回帝展に《鶴》で入選。実兄は江戸浄瑠璃清元節の二代喜久太夫。波多野一岳、松田杏亭と親しかった。



青木栖古

一八八〇—没年不詳

岐阜出身、佐々木介堂、服部石仙に四条派を学び、新古美術展には《雪中猛虎》を出品するなど、虎を得意とした画家として知られていた。朝見香城と共に、東海美術協会や中京出品協会の理事を務めるなど、中京画壇に長く貢献した。



織田旦齋

一八七九—一九六六

叔父の織田杏齋に南北合派を学び、上京し佐竹永湖に師事した。明治四十一年（一九〇八）に朝鮮半島、中国を写生旅行した。その際にソウルで韓国統監府統監（当時）の伊藤博文に拝謁し、依頼を受け北漢山、南山の絵を描いた。



織田杏逸

一八九〇—一九七〇

織田杏齋の三男。はじめ石河有鄰に学び、京都市立絵画専門学校に進学、愛土社結成に参加。青甲社にも所属し、中京美術院にも名を連ねた。大正一五年（一九二六）には父杏齋の十五回忌に当たり遺墨帖を出版した。



近藤白鳳

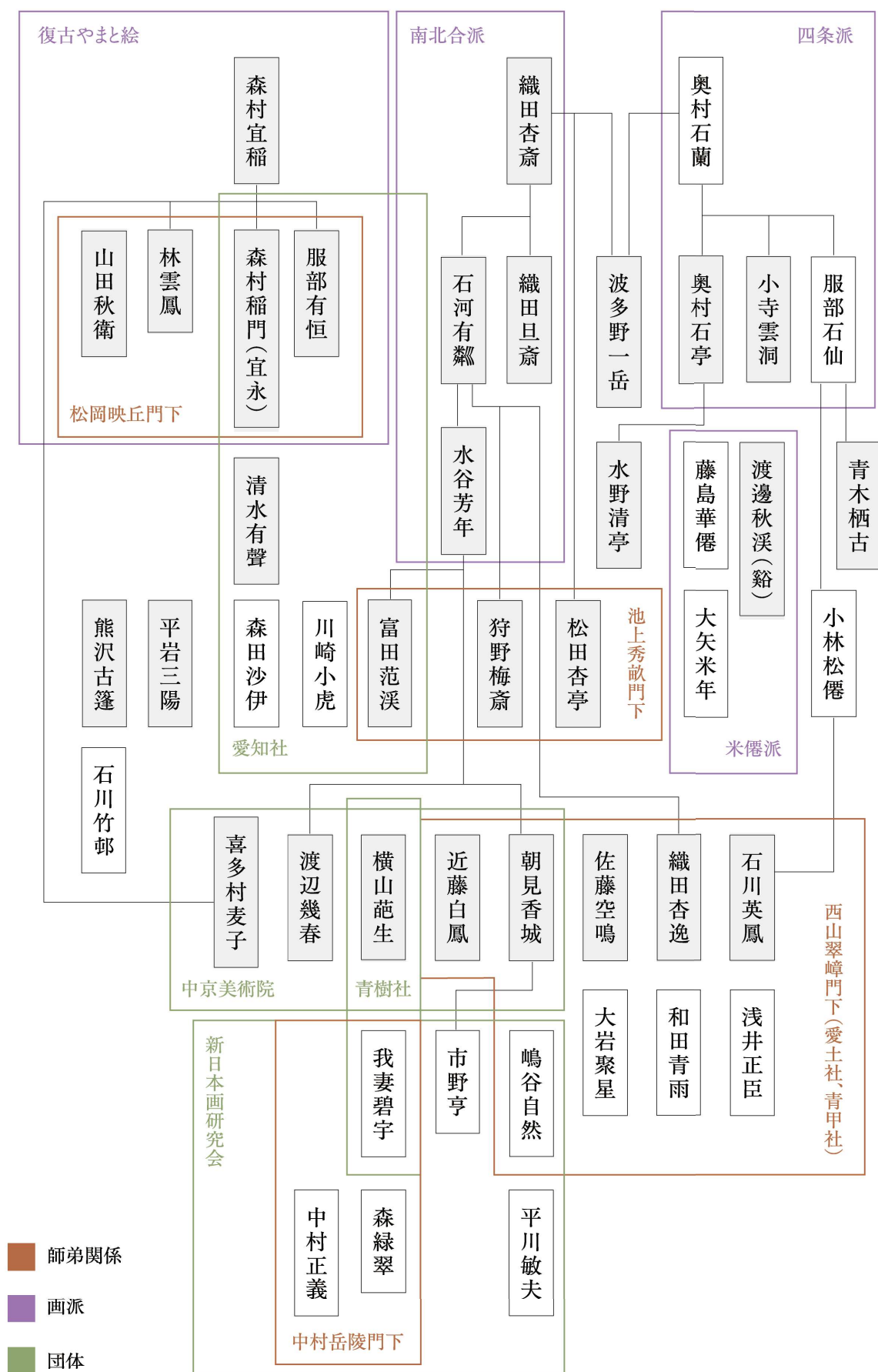
一八八九—没年不詳

小寺雲洞に日本画を学んだ後、京都に出て西山翠嶂に師事した後に帰郷、中京美術院の結成に参加した。現存作品および官展入選作、青甲社展出品作など、今日知られる作品のほぼ全てが花鳥画である。



中京画壇関連年表一明治―昭和戦前期

和暦	西暦	中京画壇に関する出来事	和暦	西暦	中京画壇に関する出来事
明治一一	一八七八	織田杏齋が『北斎漫画』十五編（完結編）に際し、足りない下絵を補うため多数の模写を行う	昭和四	一九二九	名古屋市民美術展開始、第一回展では林雲鳳、安藤美霊が専門部市長賞に、松岡映丘による講演会「新大和絵について」も開催
明治一六	一八八三	同好社設立（葦原眉山、木村金秋、奥村石蘭、小田切春江）	昭和五	一九三〇	鶴舞公園美術館が名古屋市に寄贈／第五回愛知社展で公募展開始、中京在住作家も出品可能に
明治一九	一八八六	久保田米僊、名古屋で仙洞画塾を開く			嶋谷自然が青甲社に入塾
明治二〇	一八八七	木村金秋・小田切春江が『凶荒図録』刊行	昭和六	一九三一	名古屋市新庁舎落成記念に在中京帝展日本画家十名が名古屋名所絵、松岡映丘・服部有恒が織豊の絵を献画／東海美術協会展第二十三回で無鑑査制撤廃、日本画部審査員として菊池契月を招聘
明治二二	一八八九	渡辺秋溪（谿）京都府画学校の教師に／東京美術学校（現東京藝術大学）開学	昭和八	一九三三	青樹社設立、横山葩生が顧問に
明治三二	一八九八	渡辺秋溪（谿）同好社の理事に、藤島華僊が帰名			東海美術協会が名古屋市議会に美術館建設を陳情
明治三二	一八九九	同好画会設立	昭和九	一九三四	六月、鶴舞公園美術館で名古屋帝展開催、渡辺幾春《蓄音機》など前年の帝展入選作を展示
明治三八	一九〇五	兼松蘆門『日本画沿革史』刊行			熱田神宮御遷座祭の記録絵を丹羽玉邦、森村宜稲、山田秋衛、御遷座祭絵巻を石川英鳳が担当／服部有恒が松岡映丘を盟主とする国画院に参加、森村稲門（宜永）も参加
明治四二	一九〇九	京都市立絵画専門学校（現京都市立芸術大学）開学			平岩三陽、森田沙伊、横山葩生の三相會展開催／愛土社解散・彩交会結成／帝展改組に際し、朝見香城、石川英鳳、織田杏逸、浅井正臣、近藤白鳳が不出品を表明（後に再出品）／森村宜稲が明治神宮外苑絵画館壁画《農民收穫御覽之図》を揮毫／我妻碧宇が名古屋に定住
明治四三	一九一〇	第十回関西府県連合共進会開催、付帯事業として名古屋開府三百年紀年新古美術展覧会が愛知県商品陳列館で開催／東海美術協会設立	昭和一〇	一九三五	名古屋汎太平洋和博覧会開催
明治四四	一九一一	田部井竹香著『古今中京画談』刊行／第一回東海美術協会展			森村宜稲逝去、森村稲門が画号を宜永に
明治四五／大正元	一九一二	朝見香城が名古屋に移住	昭和一一	一九三六	森村宜稲門下の服部有恒、林雲鳳、小寺礼三、喜多村光穂（麦子）、森村宜永が大稲会を結成
大正三	一九一四	山本梅莊が文展審査員に			鶴舞公園美術館が解体／名古屋市翼賛文化聯盟結成、構成団体の一つに愛知日本画文化協会、名古屋綜合芸術展開催
大正七	一九一八	愛知社結成（川崎小虎、富田范溪）／愛土社結成／国画創作協会結成			第六回新文展で我妻碧宇《林間》が中京在住日本画家初の特選に
大正八	一九一九	第一回愛知社展			
大正一〇	一九二一	帝展日本画部で中京出品作が全落選となる			
		青甲社設立、佐藤空鳴、朝見香城が初期塾員に	昭和一二	一九三七	
大正一一	一九二二	第一回愛土社展、白鳥社結成	昭和一三	一九三八	
大正一二	一九二三	関東大震災に伴い平岩三陽が岡崎に転居、石川竹邨が名古屋に疎開	昭和一五	一九四〇	
大正二三	一九二四	白鳥社解散、中京美術院結成	昭和一七	一九四二	
大正一四	一九二五	石川英鳳が蓬萊画塾を設立			
大正一五／昭和元	一九二六	織田杏逸編『杏齋遺墨帖』刊行	昭和一八	一九四三	
昭和三	一九二八	御大典奉祝名古屋博覧会開催、新規建築の鶴舞公園美術館で美術展開催、喜多村麦子《暮れ行く堀川》が銀牌に			



主要参考文献

単行本 田部井竹香『古今中京画談』興風書院、明治四四年（一九一一）

【復刻版】風媒社、昭和五二年（一九七七）

服部徳次郎『中京書家画人考』名古屋市教育局委員会、昭和四九年（一九七四）

服部徳次郎『愛知書家画家事典』愛知県郷土資料刊行会、昭和五七年（一九八二）

服部徳次郎『愛知画家名鑑』愛知画家顕頌会、平成九年（一九九七）

熊沢五六『美をきわめたるもの』熊沢五六先生米寿を祝う会、昭和五九年（一九八四）

吉田俊英『尾張の絵画史研究』清文堂、平成二〇年（二〇〇八）

論文

吉田俊英「愛知近代絵画史年表（草稿）」『名古屋市美術館研究紀要』第四卷、平成七年（一九九五）

吉田俊英「愛知近代絵画史研究2 画塾・画会研究（草稿）」『名古屋市美術館研究紀要』第九卷、平成二二年（二〇〇〇）

石崎尚「愛知県文化会館美術館における展示と収集」『愛知県美術館研究紀要』二七号、令和三年（二〇二一）

近藤将人「東海美術協会と中京日本画壇」『名古屋市美術館研究紀要 第一八巻』、令和六年（二〇二四）

定期刊行物・雑誌

「アートペーパー 名古屋市美術館ニュース」名古屋市美術館、昭和六三年（一九八八）―刊行中

「郷土美術」全五〇号、郷土美術研究会、昭和五九年（一九八四）―平成五年（一九九三）

「REAR」リア制作室、平成一五年（二〇〇三）―刊行中

展覧会カタログ

『20世紀 愛知の美術』愛知県美術館、平成五年（一九九三）

『郷土の美人画考 江戸から現代まで』名古屋市美術館、平成九年（一九九七）

『日本画の美 大正―昭和初期のやまと絵』高浜市やきものの里かわら美術館、平成一一年（一九九九）

『アイチアートのニクル 1919―2019』愛知県美術館、令和元年（二〇一九）

『近代日本の視覚開化 明治』愛知県美術館、令和五年（二〇二三）

『幻の愛知県博物館』愛知県美術館、令和五年（二〇二三）

※狩野梅齋、横山葩生については、著作権者が見つからず、図版の掲載についてご連絡することができませんでした。

著作権者をご存じの方は、名古屋市美術館までご連絡ください。



水谷芳年《花鳥図屏風》一九二〇年代「絹本着彩・屏風（六曲一隻）」

中京画壇の日本画家たち

——名古屋市美術館のコレクションより

編集・発行

名古屋市美術館

執筆

近藤将人 名古屋市美術館学芸員

発行日

二〇二五年九月二十七日

限定二、〇〇〇部「電子版と同時発行」